

スロータウン映画祭特別番 | 対談

映画館デビューは小学生のとき。父親に手を引かれ、広小路のスカラ座で上映されていた『スター・ウォーズ』が初体験だった。ミュージシャンで女好き…いや、映画好きだった父親は『ジョーズ』や『屋根の上のヴァイオリン弾き』の楽曲制作など、ハリウッド映画音楽界で脚光を浴びていたジョン・ウィリアムズの大ファン。『スター・ウォーズ』の楽曲も担当していた。「レコードではなく、映像と一緒に音楽を楽しみたかったんですよね。滅多にないことですから(笑)」と話す丸地さん。一人で観に行くのは気恥ずかしく、一緒に連れて行ってくれたのではないかと、懐かしそうに当時を振り返る。また、映画のお供として行きしなに買ってもらった富貴堂の玉ようかんは、思い出のアクセントとして記憶に深く残っているようだ。

高校を卒業する頃には、すっかり映画の魅力に取り憑かれた丸地さん。社会人になるとその熱はさらに加速。そんな時、目を止めたのが、当時人気だったタウン誌『とよはしっ子』の、とあるメンバー募集記事。それが、後にスロータウン映画祭にも深く関わる事となる映画鑑賞サークル「シネマトーク」だ。多い時は40名以上の会員が集まり、映画談義に花を咲かせていたようだ。渡辺さんと出会ったのもこのサークルがきっかけだ。

ミッドランド社会保険労務士法人

丸地 康仁さん

スロータウン映画祭 実行委員会
副会長(トマト農家)

渡辺 靖典さん



※写真はイメージです。

一 映画鑑賞サークル「シネマトーク」とスロータウン映画祭
について教えてください。

丸) テーマにした映画について一人ずつ感想や考察を話す場です。みんな話が長いから一巡するのに凄い時間がかかるんですよ。毎回、これ終わるのかな?と思っていました。

渡) 90年代前半から活動していました。当時はインターネットもなかったので、誰かと意見を交換しながら、作品を共感できる場が必要でしたから。

丸) 楽しかったねえ。でも仕事を始めたばかりだったから生活も苦しくて…5,000円の会費が払えず、退会せざるを得なかったという…(笑)。

渡) でも、戻って来ましたもんね。4、5年してから。

丸) そうなんだよ、生活も安定したから(笑)。人数は少し減っていましたがね。その数年後にスロータウ

ン映画祭が発足して、自分も何か協力できないかと考えたのが協賛広告でした。

渡) 2000年代前半は地方で映画祭がブームで、それに倣った豊橋青年会議所が「映画でまちおこし」をテーマに事業を開催したのがスロータウン映画祭の始まりです。その際、映画に詳しいシネマトークのメンバーにも協力要請があり、それからは映画祭の実行委員として一緒に運営しています。丸地さんにはスポンサーとしてお世話になっています。

丸) シネマトークが好きだったから、何か恩返しできないかなって。最初は少額だったけどね。だんだんと額も増やして、サークルの会費も払えなかった男が、今ではスポンサーだからね(笑)。

シヤインニヤタ



まるち・やすひとさん プロフィール

1969年、豊橋市生まれ。豊橋市立青陵中学校出身。豊橋工業高校を卒業後、時代の波にのまれて就職浪人。3年間、様々なバイトを転々とした後、一念発起して行政書士を目指す。1991年、行政書士資格を取得。翌年、社会保険労務士資格取得。1995年、まるち総合事務所開業。2017年、ミッドランド社会保険労務士法人 代表就任。現在は、大学生と地元企業の架け橋となるべく活動中。

Mobile.090-9172-4120

ミッドランド社会保険労務士法人

【豊橋オフィス】

豊橋市東脇4丁目21-6 TEL.0532-35-0817

【豊田オフィス】

豊田市三軒町7丁目63-5 TEL.0565-47-0111



Shining Star
VOL. 03

映画には、観た人の人生をより豊かに充実させ 人生そのものを変えられる、大きな力がある。

一 映画を好きになったきっかけは？

丸 高校生の時に観た『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』というギャング映画ですね。劇中に登場するギャングたちが男らしくて、とにかくお洒落。ちょうどファッションにも興味を持ちはじめた頃で、「いつか、あんなふうにしてスーツにハットで仕事したい!」と思っていました。それが今の仕事の原点かもしれません。ギャングになりたかった訳ではありませんが、血のつながりなど関係なく、友情を超えた仲間とファミリーが作りたかったんです。

渡 高校生の時に観た映画が多いですかね。なかでも『ミッドナイト・ラン』は、いい映画を観た!って感じでした。バウンティハンターと犯罪者の逃避行を描いたロードムービーなんですけど、あれでニーロが好きになりました。

丸 あと、「ブラット・バック」と呼ばれた青春スターがたくさん出演していた『アウトサイダー』もいい。ありふれた青春映画だけど、若者のキラキラした生き様と、スティーヴィー・ワンダーの主題歌『ステイ・ゴールド』がシンクロしていて心に沁みるんです。自分もずっと輝き続けたいなって、そんな気持ちにさせてくれる映画です。

一 特に影響を受けた作品は？

渡 マッドマックスシリーズの4作目『怒りのデス・ロード』の最後のシーン。主人公のマックスが眼で別れを告げ、一人去っていくんです。あの、さりげないカッコ良さが凄く好きです。大業を成し遂げたのに、出しゃばらない、あの奥ゆかしさに惚れますね。

丸 理想というか「あんなふうになりたい」が見つかるのが映画じゃないですか? シンプルに欲望や憧れみたいなものが具現化されているから。僕は男女のロマンスが描かれた作品が大好き。でも、ハッピーエンドじゃないほうがいい。『トウルー・ロマンス』みたいな、ちょっと突き抜けた青春映画も好きだけど、豪華なホテルでアマポーラを踊りながら好きな女性に告白する。でも振られちゃう、みたいな(笑)。そういうロマンチックなシーンに今でも憧れます。映画に恋するというか、どんどん理想が高くなっちゃう。だから結婚も出来ないんだね(笑)。

渡 僕は現実的なほうがいいですけどね。

丸 映画の中の女優さんとか好きにならないの?
渡 そんな人、その辺歩いてないじゃないですか。ピンときませんよ(笑)。でも、10年くらい前に園子温監督がスロータウン映画祭に来てくれたんですけど、その懇親会の席にとんでもない美人がいたんです。綺麗すぎて腰を抜かしましたよ。「こんな人、豊橋にいるんだ!」って思っていたら、それ、まだ売れる前の満島ひかりさんでした。ちょうど「愛のむきだし」を撮影している時で、園監督が連れて来ていたんです。

丸 そうなの!? 話した? サインとかもらった?
渡 無理無理、綺麗すぎて。「写真撮ってもいいですよ」なんて、気さくに言われていましたけど、もう、怖くて近寄れませんでした、綺麗すぎて…笑。

一 デートで観に行った映画はありますか?

丸 それはないね。隣の女性の方が気になっちゃって映画どころじゃないから(笑)。

渡 映画好きはデートプランに映画は盛り込まない気がします。それこそ集中できない(笑)。

丸 でも、タイタニックはちょっと駆り立てられる要素があったかな。二人が船首で両手を広げる場面とか、みんな真似してたよね? 「タイタニック観に行かない?」って誘ってOKだったら可能性はゼロじゃない、みたいな。「一人じゃ恥ずかしくて観に行けない」とか、誘う口実考えて。なんなら本当に観たい訳でもないし、むしろ何回観たんだっていうね(笑)。

一 映画館の良さを教えてください

丸 我々の世代は「まちなに出ないと映画が観られない」のが魅力でもあったよね。映画館の暗闇に入ってくと、同じように観に来ている人がいて。会話はしないけどコミュニケーションの場でもあったのかな。

渡 動画配信サービスに加入しているの、いつでも好きな映画が観られる環境にあるけど…あまり観ないんです。だからって映画館至上主義って訳でもないですが、むしろ、映画館の方が不快な思いをする事が多いです。どちらかと言えば映画館鑑賞は「儀式」に近いかな。観るぞ!って(笑)。時間とお金を使っているから、楽しもうとしますね。丸地さんの言うように共感性もあります。映画を観終わった後、館内がいい雰囲気になる時がある。一体感というか「良かったね!」なんて話す訳ではないけど(笑)。

一 現在のスロータウン映画祭について

渡 今年22年目となりますが、どこか自己満足になっているようにも感じます。もちろん、皆さんが楽しめる企画に注力していますし、映画の中には映画館以外では放映できない作品もあったりするので、

限られた作品からロジカルに考えて選定していますが…集客の伸びない作品も多くて、難しいなど。だから、もっとお客さんやスポンサーの声に耳を傾けるべきなんです。映画でまちなかの賑わい創出を目指して始まったスロータウン映画祭ですが、映画館に足を運ぶ文化が薄れている昨今、時流に合わせたカタチの变革は必須だと感じています。

丸 そだね。雑多だったけど、我々の知っている昔の楽しいまちに戻ることはないかもしれない。でもさ、それも時代だし、映画は映画。別腹でいいよね(笑)。それに、名作だけじゃなくて、仮に駄作と呼ばれる作品でも「あそこ良かったね!」って、何かを吸収できる場面が必ずある。そんな作品に出会う度に、シーンをいくつも紡いで、好きなモノを発見したり、新たな人生のストーリーや目標を予感させたり。その機会のひとつがスロータウン映画祭だったら素敵じゃない? スクリーンの向こう側に憧れて、いつまでも夢を持ち、ドキドキ、ワクワクしている方が楽しいね(笑)。だから、幾つになっても心は新鮮な子どもままでいい! 結婚も出来なくていい(笑)! いつまでも色褪せる事なく黄金色のままで、そうだろジョニー! Stay gold!



▲丸地さんがスターウォーズを観ながら食べた思い出の風船に入り玉ようかん。

有限会社 富貴堂
豊橋市日色野町新切23番1



取材・編集・制作
Blend marketing design

株式会社ブレンド・マーケティングデザイン
豊橋市広小路2丁目1 広小路画廊ビル5F
TEL.0532-57-1508

